

公募企画

公募企画シンポジウム18

看護の専門性を基盤とするケアマスタの開発とその活用

2017年11月23日(木) 12:45 ～ 14:15 B会場 (12F 会議室1202)

[4-A-2-PS18-1] 看護の専門性に裏づけられた高度な判断や情報提供を支援するアセスメント重視のケア計画マスタの実現

宇都 由美子（鹿児島大学大学院医歯学総合研究科）

少子高齢社会の急速な進展は、医療制度改革にも大きなインパクトを与え、地域包括ケアシステムの構築が短期間で進められようとしている。急性期医療から在宅までの円滑な連携を図り、地域全体で患者や高齢者を見守る仕組み作りが模索されている。病院の機能分化、さらなる在院日数の短縮化が求められる中、看護の役割も大きな方向転換を余儀なくされている。すなわち、①入院目的の達成・アウトカムに焦点を当てた看護実践、②症状のコントロール・マネジメント、③日常生活動作の自律への支援であり、効果的なケアの提供が地域包括ケアシステムの構築に不可欠な要素となる。労働生産層人口が減少し、高齢人口が増大していく過程において、CureよりCareに対するニーズが高まり、医療情報と介護情報の切れ目のない連携が求められる。医療や介護のICTは急速な進展を見せているが、情報の連携のためには、情報交換に必要な用語や項目の標準化が重要である。

日本医療情報学会の課題研究会として、我々は「医療ICTと在宅連携のための標準看護マスタのモデル研究会」を発足させた。目的は、我が国に適した医療ICTにおける標準看護マスタのモデル化を図ることである。電子カルテの開発、普及は、診療記録の役割と可能性を大きく変えた。チーム医療の推進や患者との情報共有の有効なツールとして、医療従事者のみならず国民からも大きな期待が寄せられている。我々は電子カルテをはじめとする医療ICTを利用して、看護の専門性に裏づけられた高度な判断や情報提供を行っていききたいと切に願っている。そのために不可欠なアセスメント重視のケア計画マスタの実現のために、本シンポジウムで皆様と忌憚のない意見交換ができることを期待している。

看護の専門性に裏づけられた高度な判断や情報提供を支援する アセスメント重視のケア計画マスタの実現

宇都由美子^{*1}、石垣恭子^{*2}、岡田みずほ^{*3}、村岡修子^{*4}、前田直美^{*5}、伊藤明美^{*6}、柏木公一^{*7}、

^{*1} 鹿児島大学大学院医歯学総合研究科医療システム情報学、

^{*2} 兵庫県立大学大学院応用情報科学研究科看護情報学領域、

^{*3} 長崎大学病院看護部、^{*4} NTT 東関東病院看護部、^{*5} 医療情報システム開発センター、

^{*6} 神戸市立医療センター中央市民病院看護部、^{*7} 国立看護大学校、

Implementation of an assessment-oriented care planning master that supports high level judgments and information provision based on nursing expertise

Yumiko Uto^{*1}, Kyoko Ishigaki^{*2}, Mizuho Okada^{*3}, Shuko Muraoka^{*4}, Masami Maeda^{*5},

Akemi Ito^{*6}, Koichi Kashiwagi^{*7}

^{*1} Dept. of Medical Information Sciences Graduate School of Medical and Dental Sciences, Kagoshima University,

^{*2} Graduate School of Applied Informatics University of Hyogo,

^{*3} Dept. of Nursing, Nagasaki University Hospital, ^{*4} Dept. of Nursing, NTT Medical Center Tokyo,

^{*5} Medical Information System Development Center, ^{*6} Dept. of Nursing, Kobe City Medical Center General Hospital,

^{*7} National College of Nursing, Japan,

Abstract

The rapid aging of society and decline in birthrate have a major impact on medical system reform, and the construction of community-based integrated care system is on the verge of progressing in a short period of time. The creation of a system to monitor patients and elderly persons in the local community with the aim of ensuring smooth cooperation between acute care and home care is being searched for. As the functional differentiation of hospitals and shortening of the number of hospital days becomes necessary, the role of nursing has also been forced to make a major change. That is, (1) nursing practice focused on achievement of hospitalization goals/ outcomes, (2) control and management of symptoms, (3) support for autonomy in performing activities of daily living; providing effective care is an essential element for constructing local area comprehensive care systems. As the population of the labor force decreases and the elderly population increases, the need for care is higher than the need for cure, and unbroken coordination between medical information and nursing care information is required. Although ICT for medical care and nursing care shows rapid progress, standardization of terms and items necessary for information exchange is important for coordination of information.

As a research workshop on Japan Association for Medical Informatics, the "Model Study Group for Standard Nursing Masters Regarding Healthcare ICT and Home Coordination" was established. The objective was to model the standard nursing master in medical ICT suitable for Japan. The development and dissemination of electronic patient records has greatly changed the role and possibilities of examination records. As an effective tool for promoting team healthcare and sharing information with patients, there is great expectation not only from health care practitioners but also from the residents.

Keywords: assessment-oriented care plan, community-based integrated care system, standard nursing master,

1. はじめに

少子高齢社会の急速な進展は、医療制度改革にも大きなインパクトを与え、地域包括ケアシステムの構築が短期間で進められようとしている。急性期医療から在宅までの円滑な連携を図り、地域全体で患者や高齢者を見守る仕組み作りが模索されている。病院の機能分化、さらなる在院日数の短縮化が求められる中、看護の役割も大きな方向転換を余儀なくされている。すなわち、①入院目的の達成・アウトカムに焦点を当てた看護実践、②症状のコントロール・マネジメント、③日常生活動作の自律への支援であり、効果的なケアの提供が地域包括ケアシステムの構築に不可欠な要素となる。労働生産層人口が減少し、高齢人口が増大していく過程において、CureよりCareに対するニーズが高まり、医療情報と介護

情報の切れ目のない連携が求められる。医療や介護のICTは急速な進展を見せているが、情報の連携のためには、情報交換に必要な用語や項目の標準化が重要である。

日本医療情報学会の課題研究会として、我々は「医療ICTと在宅連携のための標準看護マスタのモデル研究会」を発足させた。目的は、我が国に適した医療ICTにおける標準看護マスタのモデル化を図ることである。電子カルテの開発、普及は、診療記録の役割と可能性を大きく変えた。チーム医療の推進や患者との情報共有の有効なツールとして、医療従事者のみならず国民からも大きな期待が寄せられている。我々は電子カルテをはじめとする医療ICTを利用して、看護の専門性に裏づけられた高度な判断や情報提供を行っていきたいと切に願っている。そのために不可欠なアセスメント重視のケア計画マスタの実現のために、本シンポジウムで皆様と忌憚のない意見交換ができることを期待している。

2. 平均在院日数の短縮

厚生労働省による平成 27 年(2015 年)医療施設(動態)調査・病院報告の概況調査では、「一般病床」のみならず、「感染症病床」「精神病床」「療養病床」の平均在院日数が短縮している。「結核病床」や「介護療養病床」については、短縮していないが、病院の全病床で見れば短くなっている(図 1)¹⁾。特に、地域包括ケアシステムの構築が短期間で進められようとしている中、急性期一般病床では、2 年毎の診療報酬改定において、確実に短縮が進み、病床数の削減に備えられつつある。

図 5 病院の病床の種類別にみた平均在院日数の年次推移

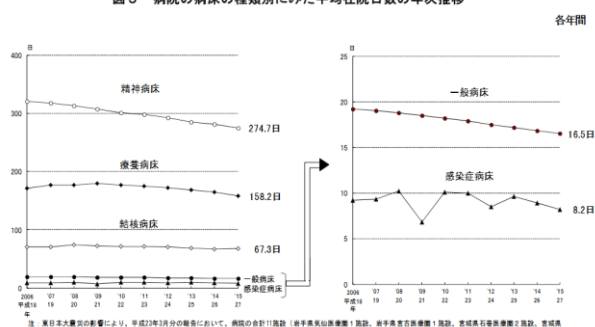


図 1 病院の病床の種類別にみた平均在院日数の年次推移

一方、2003 年から急性期入院医療に DPC (Diagnosis Procedure Combination)による包括評価制度が導入されるようになると、入院期間の短縮が病院収入に影響を及ぼすようになった。各医療機関は全国平均である DPC 入院期間 II を目途に退院調整を行うようになった。また、それを確実に達成できるように、クリティカルパス(CP)の導入が積極的に行われるようになり、その目安として、DPC ごとに入院期間 II を参考に CP が作成されるようになった。

3. 効率的で効果的なケアの提供

病院機能の分化、さらなる在院日数の短縮化が求められる中、看護の役割として、①入院目的の達成・アウトカムに焦点を当てた看護実践、②症状のコントロール・マネジメント、③日常生活動作の自律への支援がより重要となってきた。すなわち、患者からの情報収集、患者問題の明確化、計画、実施、評価という看護過程のプロセスを、より効率的により確実に実践できる能力が必要となる。看護過程において、アセスメントは各プロセスにおいて不可欠な基盤となる。患者からの情報収集を行う際に意図的に行えるアセスメント能力、患者から得た情報の解釈、看護の視点から患者の問題を判別できる能力、患者の問題に焦点を当てた情報の収集、それらの解釈・分類と分析・統合する能力。そして、問題の明確化を図り、患者とともにゴールを設定するアセスメント能力が、効率的で効果的なケアの提供につながる。

看護のシステム化は、これまで看護過程を支援する機能を中心に開発されてきた。第1ステップの情報収集の段階において、ヘンダーソンの二ード論、オレムのセルフケア理論、ゴードンの機能的健康パターンなどを使って、情報収集不足を防ぐというシステム活用例がある²⁾。次に、患者問題の明確化により、患者のケアプランの作成支援機能は多くの医療機関で活用され、また、計画に沿った実施入力によって、看護記録が作成されている。

このように、看護過程を支援するシステム開発とその普及

は進んでいるが、肝心の看護マスタ、すなわち標準的なケア計画マスタの整備が遅れている。そのために、医療機関独自で開発した看護計画マスタや NANDA-I-NIC-NOC などを導入している医療機関が多い。医療機関独自マスタは標準化という点から問題があり、後者は日本語に馴染まない訳語が多く、チーム医療に適さないという問題点が指摘されている。

4. 看護情報の二次利用

看護情報の 2 次利用については、大量データの収集・蓄積を可能とする病院情報システムの導入が絶好の機会となる。しかし、とりえず入力しておけば、後でなんとか利用できるだろうという安易な取り組みでは、その成果は期待できない。

これまで、システム化により看護過程を支援したデータの収集・蓄積が行われてきた。データの二次利用を意識した場合、標準的なケア計画を患者の個別性に合わせて編集加工した計画データより、計画の変更も含めた実施データが二次利用に適している。

これまで述べてきたように、入院期間の更なる短縮化、アセスメントと紐づいた標準的なケアプランの必要性、それらに基づくデータ収集・蓄積における二次利用という課題解決に向けた活動が必要である。このような切なる思いから、我々は日本医療情報学会の課題研究会として、「医療 ICT と在宅連携のための標準看護マスタのモデル研究会」を発足させた。

我々のこれまでの活動として、看護実施データと DPC を活用した標準的なケア計画の作成、そして、入院期間の短縮化に対応できるマスタメンテナンスのためのシステム支援機能の開発を行ってきた。さらに、アセスメントと関連づいたケア実施データを収集できるように、アセスメントの分類を行い、それらと看護実践行為との体系化を図った。本シンポジウムにおいて、それらの詳細な紹介とユースケース、今後の発展などについて話題提供ができればと考える³⁾。

5. 今後の展望

今後 10 年から 20 年間は地域包括ケアシステムの構築、安定的稼働に向けた国策が次々と展開されることが予測できる。標準的なケア計画についても、ユビキタスなど情報基盤の画期的な変革に伴って、医療機関から療養施設、在宅へと目覚ましい発展を遂げることが期待できる。今後とも、これらの連携に繋がる標準的で持続可能な循環型のケア計画の構築に取り組んでいきたい。

参考文献

- 1) 平成 27 年(2015)医療施設(動態)調査・病院報告の概況 <http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/iryosd/15/dl/gaikyo.pdf>, 厚生労働省
- 2) 吉原理恵子:看護記録のスリム化に向けた取り組み、看護さろくと看護過程 25(6)、p43-55、2016..
- 3) 宇都由美子、花原康代、岩穴口孝、落合美智子、市村カツ子、村永文学、熊本一朗:ケアの実施データの二次利用による持続可能な看護計画の見直しツールの開発、第 18 回日本医療情報学会看護学術大会論文集、p.63-65、2017.